

ミャンマー中央乾燥地にてM-StAR長根苗の技術を開発中

ミャンマーは約6,800万haの国土（日本の1.8倍）に、2020年時点では2,900万haの森林（日本の1.1倍）が広がっています。30年前の1990年の森林面積は3,900万haだったのですが、農地転用等によって4分の1が消失してしまいました。この減少速度はブラジル、インドネシア、コンゴ民主共和国といった広大な森林面積をもつ国々に次ぐ速さであり、ミャンマーの森林破壊で排出される年間CO₂の量は4,800万t-CO₂/年（2005-2015年の平均）にも及び気候変動への影響が懸念されています。

ミャンマー森林局もこの事態を重く受け止めており、2017年に「ミャンマー再植林・修復計画（MRRP）」を策定し、地域住民による林業や燃料供給のための植林政策を進めているところです。JIFPROは1997年より多くの企業・個人の方々から寄せられた寄付金を基に、ミャンマーでの地域住民の生計向上を目的とした植林活動を支援してきました。我々が着目したのは、ミャンマーの国土の12%占める中央乾燥地（年平均降水量は1,000mm以下）です。このような乾燥地では単に苗木を植えるだけではうまくいきません。60cm四方の大きな植穴をあけ、そこを耕した状態にし、雨季の降水が苗木周辺にとどまりやすいような状態にすることで、雨季中の根の発達を促し、厳しい乾季を乗り越えられるようにします。それだけでは足りない場合は乾季に灌水も行います。このような方法で8～9割の活着率が得られていますが、大穴を掘るには労力と時間、灌水には給水車が必要なので、なかなか地域住民主導で植林するのは難しいのが現状です。また、植栽時期が雨季前半に限られているので、植林のタイミングを逃してしまうこともあります。実際、ミャンマーの植林達成面積は前述のMRRPが定めた目標値を大きく下回っています。



M-StARコンテナによる長根苗の植栽



森林局職員向けに長根苗に関する研修を
JICAと共同開催

そこで、JIFPROでは同地域での植林活動を促進するべく、2017年より林野庁補助事業「途上国森林再生技術普及事業」において、長根苗の育成・植栽試験を実施しています。予め深さ60cmのM-StARコンテナで苗を育てた長根苗は、植栽後の根の深い土層の水分へアクセスがしやすいので、電動ドリル等で簡単に掘れる細長い植穴に植えるだけで、無灌水でも高い活着率が見込めるのではと考えました。通常苗がほとんど枯死する中、長根苗は順調に生育していることが確認されました。実用化に向けてはまだ検討余地がありますが、この方法が確立すれば、大きな植穴や灌水の必要もなくなり、植栽時のコスト（労力）を大幅に下げることが期待されます。ミャンマーの植林の動向に関してはJIFPROが刊行する「海外の森林と林業」のNo.109にもまとめております。＜柴崎一樹ほか、"ミャンマーにおける植林の動向 -中央乾燥地域を中心に-" 海外の森林と林業109 (2020): 13.>

WEBセミナー「日本の知恵（ナレッジ）で途上国の森林資源問題に対処する」の開催

2021年3月10日（水）、表記のセミナーがオンラインにて開催されました。このセミナーでは、林野庁の補助事業「途上国森林ナレッジ活用促進事業」の本年度の成果が発表され、今後の展開に向けた議論が行われました。参加者はオンラインで100名を超えとなりました。

開発途上国では、今なお多くの森林が失われつつあります。この原因の一つに貧困があり、森林減少や劣化を抑制するためには、森林産品からの収入により森林に依存して生活する人々の生活が豊かになることが必要です。一方、日本には森林産品に係る伝統技術や先端技術があり、本事業はこれらの「ナレッジ」を生かして途上国の森林産品バリューチェーンのボトルネック解消に繋げようとするものです。セミナーでは、冒頭、林野庁の山崎敬嗣・海外林業協力室長の挨拶、当センターの太田誠一理事長からの趣旨説明の後、本事業の事業内容やコンセプトの説明及び本事業で立ち上げるナレッジデータベース「ChiePro」の説明がありました。さらに、磯貝明・東京大学特別教授から「セルロースナノファイバーの活用事業と可能性」と題して基調講演があり、植物資源から製造される新規バイオ系ナノ素材である、セルロースナノファイバーの開発状況と、この分野での拡大が地球温暖化や循環型社会の構築に向けた可能性が示されました。続いて、2020年度の活動であるミャンマーのタケ加工技術についてNPO法人アジアクラフトリンクから、カンボジアのチョウ類飼育事業についてコンサベーションインターナショナル・ジャパンから発表がありました。最後に、基調講演をいただいた磯貝教授、本事業の委員でタケ分野の指導をいただいている柴田昌三京都大学大学院教授、チョウ分野の指導をいただいている矢後勝也東京大学総合研究博物館助教、林野庁から山崎室長がパネリストとなりパネルディスカッションが行われ、ナレッジの技術移転のあり方や今後の展望などについて活発な議論が行われました。今回のセミナーの議論が今後のナレッジ事業の展開に生かされることを願っています。



JIFPROへのご支援（2020年度の実績）

JIFPROでは皆様からご支援をいただき様々な活動を行っています。その「支援」として以下の三通りがあります。

種別	支援対象	回数	金額
賛助会費	JIFPRO活動全般	継続	定額
一般寄付	JIFPRO活動全般	一回から／継続	任意
熱帯林造成寄付	熱帯林造成活動	一回から／継続	任意

2020年度の皆様からのご寄付の総額は875万円となっており、このうち熱帯林造成ためのご寄付が750万円となっています。こうした皆様からのご支援に感謝するとともにJIFPROではこれからも熱帯林の保全、造成に向けた活動を積極的に実施するつもりです。

ミャンマーでの活動を一時休止

2021年2月、軍事クーデターが起きたミャンマーですが、その後、民主化を求めるデモ活動とそれを鎮圧するための軍事政権との対立が激化しています。JIFPROでは軍事クーデター直後からこれまで一緒に活動をしてきたミャンマーの担当者とメールで連絡をとって現地情報を収集してきました。

こうした情勢の中、ミャンマー側の意向もあり2021年度については同国での活動を見合わせるようになりました。ミャンマーで実施する予定の植林については急遽、ベトナムに振替えて行う予定です。なお、今後については状況を見て判断することになりますが、政情が安定すれば支援を再開したいと考えています。

